

ガラテヤ書2章1-10節 「一步も譲らない福音」

1A 人々に示す福音 1-5

1B 異邦人テトスの受容 1-3

2B 福音の真理の固持 4-5

2A 付け加えられなかった福音 6-10

1B それぞれの召命 6-8

2B 交わりの右手 9-10

本文

ガラテヤ人への手紙2章を開いてください。今晚は、前半部分 1-10 節を読みます。パウロは続けて、自分の伝えている福音が神から来ているものであることを論じています。今、ガラテヤ地方にある諸教会に、パウロの宣教の後に偽教師たちがやって来て、「イエス・キリストを信じるだけでは足りない。割礼を受けて、モーセの律法を守って、それで初めて神の国に入ることができるのだ。」とする教えを伝えているのですが、彼らは、パウロを引き落とし、そして自分たちがエルサレムの教会から来た者たちだと主張していました。「パウロは、まだよく分かっていない信者で、あなたに伝えていたのは不十分な福音だったのだ。」ということ、教えていました。

そこで、パウロは彼らの異端性をはっきりと主張しました。それは、彼らは、福音というのは人からの認証、人から出てくるものであるという前提があったからです。しかし、パウロはどんな人が語ろうとも、自分自身が語っていても、それが福音と異なるものを話しているのであれば、呪われるべきであると断じたのです。福音は、神から来たものです。これは、どちらが正しいのかという問題ではなく、神に対して申し開きしなければいけない問題です。それでパウロは、彼らの依拠している、エルサレムにいる教会指導者たち、ペテロやヤコブのことを取り上げて、自分は主イエス・キリストから啓示を受けて、それから誰にも相談しないことを論じました。人という要素が、一切ないのだということです。

ここが大事です、異端は人を権威の源としています。聖書の他に、自分たちの教えに従わなければ、あなたがたは救いを失うと教えます。エホバの証人であれば、聖書の他に、自分たちの掲げる「目覚めよ」の雑誌を読むことを強要します。それがなければ、聖書を正しく解釈できないと言います。聖書だけでないのです、他に付け足すのです。神の恵みだけのところに、何かを付ける。イエス・キリストだけでなく、他に何かを付ける。これが最も大きな問題です。そして 2 章では、こうして福音は、神からのみ、キリストからのみの啓示なのだということを前提にして、教会においては、見事な一致があるということ。イエス・キリストの福音を主体的に信じる者たちが、見事に一つにされていることを見ることができます。

1A 人々に示す福音 1-5

1B 異邦人テスの受容 1-3

1 それから十四年たって、私は、バルナバといっしょに、テスも連れて、再びエルサレムに上りました。

ガラテヤ書 1 章によると、回心したパウロはダマスコからアラビヤに行き、三年後にエルサレムに立ち寄りました。ペテロのところに泊まり、ヤコブにも会いました。どちらもエルサレムにおいて、教会の柱とみなされていた人々です。けれども 15 日間だけの滞在であり、それから小アジアのシリヤとキリキヤ地方に行きました。使徒の働きによると、彼は故郷の町タルソに住んでいました。

けれども、エルサレムから次第に、サマリア人への宣教、それから異邦人に福音を伝えるような動きがありました。決定的だったのは、ペテロが、ヨッパにおいて幻を見て、カイザリヤにいる百人隊長コルネリオに福音を伝えた時です。イエス様が信じる者に約束されていた聖霊のバプテスマを、異邦人である彼らも福音を聞いて与えられたのを目撃しました。その時にペテロは、異邦人も神を信じるその信仰によって、心が清められるのだと悟ったのです。自分たちはユダヤ人であり、律法を守ってきたが、それでも義と認められなかった。イエス様を信じたからこそ、罪を赦していただいた。これは、異邦人も同じことなのだ悟ったのです。

そのような聖霊による教会の動きがあり、パウロがエルサレムに一時期、立ち寄ったのです。その時に、既にバルナバという人がエルサレムの教会では認められていました。バルナバは、「慰めの子」という意味ですが、確かに、二つに分かれているような時に人々に慰めを与え、一つにさせていく賜物を持っていました。使徒 4 章最後によると、彼は率先して自分の財産を売って、その代金を使徒たちのところに持って来ていました。愛の行ないによって認められていた彼ですが、パウロがエルサレムに来た時に信者たちが恐れていたところ、バルナバが、パウロが回心した話を説明して、それで彼がエルサレムでも自由に出入りできるようになりました(使徒 9:27)。

このように異邦人への宣教の働きが進んでいっている時に、ローマでも有数の都市であった、アンティオケにおいて異邦人が大勢、主を信じていきました。そこでエルサレムにある教会は、バルナバをそこに遣わしたのです。それで教会が建てられました。そこでバルナバは、パウロをタルソで捜し当て、それで彼をアンティオケに連れてきて、彼らはその教会で教師となったのです。そして後に彼らは、聖霊によって遣われて小アジアに第一次宣教旅行に行きました。アンティオケに戻ってきて、その恵みの報告をしたのです。

そして長い期間を経た後に、ここに出てきた問題があります。使徒 15 章を開いてください。「15:1-2 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」と教えていた。そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題に

ついて使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。」これが、ここガラヤ 2 章の背景です。それゆえ、バルナバという存在はとても大切でした。パウロとは異なり、バルナバはエルサレムにおいて認められた人であり、そしてパウロを知っており、彼と共に宣教旅行をしていたものです。彼は架け橋のような存在であり、これら偽りの教えを唱える者たちの、パウロの伝える福音を押しつぶそうとしている動きに対抗する時に必要な人になります。

そして、もう一人大切な人がいます、テスです。テスは、コリント人への手紙で数多く出てくる人で、パウロによってかけがえのあい大切な兄弟であり、同労者でした(例:2コリント 8:23)。そして彼個人にパウロが手紙を書いて、「テスへの手紙」があります。ここで大事なのは、彼はギリシヤ人であったということです。ユダヤ教に改宗することなく、異邦人のままで福音を信じて救われている兄弟として、彼の存在そのものが神の恵みの証しであります。ですから、エルサレムの教会で認められている兄弟バルナバと、異邦人の中での神の救いの実であるテスを連れて、エルサレムに向かいました。

2 それは啓示によって上ったのです。そして、異邦人の間で私の宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人たちには個人的にそうしました。それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。

パウロは注意深く、エルサレムに行ったのも「啓示によって上った」と言っています。これは、使徒たちに自分が認められるために行ったのではないことを示すためです。主ご自身がそうしなさいと示されたということを示すことによって、エルサレムの使徒たちから認められたのではないということを示します。多くの働き人が、誰かに認められないと自分は神から認められていないののではないかと、という不安を抱いています。例えば、神学校にいて牧師の免許をもらうことが、それが召命なのだとか勘違いしています。それは、後で確認されるものであっても、認められるものではありません。

そして、異邦人の間に宣べ伝えている福音を、「人々の前に示し、おもだった人たちには個人的にそうしました。」と言っています。この働きは大切です。それは、パウロは、イエス様の父なる神に対する祈りがあるからです。「ヨハネ 17:23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」私たちは、一つのキリストの体に召されています。したがって、それぞれが神に召されてキリストにつく者にされたのですが、それを人々の前に出して、公にして、確かに私たちはキリストの言われたように一つにされていることを言い表さないといけないのです。それが、主だった人々の前では個人的にそうしていた、と言っていますが、そうですね指導者の間でこのことを確認することによって、その公の信仰の宣言が意味を持ちます。

そして、パウロは自分のしていることを、「力を尽くして走っている」と表現しています。彼はこれまでも、信仰によって生きることを、神からの賞を得るための競走であることを表現してきました。「ピリピ 3:13-14 兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」そして、この走ってきたことが無駄になってしまうというのは、この恵みの福音が台無しにされてしまう、偽教師らによって無き物にされてしまうことを懼れたからです。

私たちは、多かれ少なかれ、恵みの福音が無き物にされてしまうものとの戦いの中にいます。イエス・キリスト福音によって、罪赦され、新しい命を得たというこの恵みが、いつの間にか他のものに変えられているという惧れがあるのです。「2コリント 6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。」そして、福音の奉仕者にはパウロと同じく、神の恵みが恵みのままで留まっていることができるように務めています。

3 しかし、私といっしょにいたテトスさえ、ギリシヤ人であったのに、割礼を強いられませんでした。

パウロたちが、エルサレムに行って、ペテロやヨハネ、ヤコブらに会いました。もし、これらユダヤ主義者の言っていることが正しければ、テトスは割礼を強いられたはずですが、しかし、彼らはそれを行ないませんでした。偽教師たちが権威として掲げていた彼ら自身が、パウロの宣べ伝えている福音に同意していたのです。ヤコブも、彼らのことについてこう言いました。「使徒 15:24 私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。」

ところで、ここで割礼が大きな問題となっていますが、割礼を受けること自体が罪なのではありません。割礼は、ユダヤ人にとって神の契約の民になるための印でした。主がアブラハムに対して、自分の子孫に割礼を受けさせなさいと命じていました。その子種が確かに、神に召された者たち、神の子孫であることを示すためです。そして主は、モーセを通して生まれてから八日目の男子に割礼を受けさせなさいと命じておられます。しかし、これはユダヤ人に対する者であり、異邦人に対するものではありません。そしてキリストが来られた今、ユダヤ人であっても割礼を受けなければ神の国に入れないということではありません。キリストを信じるということだけが条件です。

そこで、パウロは、この使徒 15 章で行われたエルサレムにおける会議の後、宣教旅行に行つてテモテに対して割礼を受けさせています。「使徒 16:3 パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みな知っていたからである。」ユダヤ人に対して、彼が無割礼であるということで、驚いたり、福音を聞き入れないということがないように、宣教のため、愛の動機からあえて割礼を受けさせま

した。しかし、動機が、これを受けなければ救われないというものであれば、それは絶対に、断固として拒まなければいけない異端の教えになるのです。

2B 福音の真理の固持 4-5

4 実には、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちに奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。

このことが問題でした。「忍び込んだにせ兄弟たち」であります。彼らのことを偽兄弟と呼んでいます。兄弟と呼ばれているけれども、実はそうではない者たちです。もし兄弟であれば、その人は神から生まれたものであり、私たちは交わりをすることができます。しかし、兄弟と名乗っていても兄弟ではなければ、彼らは私たちの仲間ではありません。その時はまるで兄弟であるかのように、受け入れてはいけなく、もし兄弟であるならばキリストにある者という理由だけで受け入れなければいけません。「2ヨハネ 10 あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。」

そして偽兄弟たちの特徴は、「忍び込ん」でいるということです。自分たちが偽兄弟です、なんていうことをもちろん言う訳がありません。彼らの多くが善意に満ちているでしょう。しかし、誠実に間違ったことをすることができます。むしろ、人間的には良いと思われていることで知られている人が、偽の教えを持ち込む可能性が大きいのです。上昇志向にある人が、なりやすいです。なぜなら、自分の行ないで救いを得られると思っているからです。ですから、自分の行ないを前面に出して、なるべく間違いのないように気をつけます。

それで、私たちキリスト者は騙されやすくなります。自分は、主の御心になんて生活していないという引け目、後ろめたさを感じながら生きていますね。そこに、自分のまさに理想とするような行いをしている人が現れたらどうでしょうか？引きこまれていこうと思えます。しかし、そこからはくりがあります。一つは、良い行ないはあくまでも神の用意くださっているものであり、神の恵みによって与えられる賜物だからです。根っこが神の恵みでなければいけないのに、茎や葉を見て、根を張らずにそれだけを行おうとします。すぐに、萎れて干からびてしまいます。そしてもう一つは、実はそのすばらしいと思える良い行ないは、見せかけだということです。人間的な正しさであり、この世ではそれは良いことだと思われているかもしれませんが、実はそうではなく、メッキが必ずはがれます。必ず、真実な行ないとしてその人が実は何を信じているか明らかにされます。

そして、彼らがしようとしていることは、「私たちに奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがう」としています。具体的には、これは割礼を受けて、律法にある各種の戒めに従うことを意味していました。4章9節で、ガラテヤの信者がすでに奴隷にされていることが分かります。「ガラテヤ 4:9-10 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知

られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。」これは安息日や新月の祭り、例年行なう祭りのことを指しているでしょう。再び、これらを行なうこと自体に何ら問題はありませぬ。安息日や祭りが、キリストにあって成就したのだということさえわきまえていれば、問題ないのです。しかし、これらのことをしてこなかった異邦人に対して、ただキリストの恵みで喜んでいるところに、これらのことをしなければ神の国に入れないう言え、それは強制であり、偽の教えになるのです。

こうした教えが巷には数多くあります。それらは、いとも簡単にそうなってしまいます。イエス・キリストの福音を信じていること、そこにある自由こそがキリスト者の醍醐味であるのに、それだけでは足りない、これこれを行なっていかなければいけないと強要します。その一つ一つは良いものかもしれませんが、しかしそれがなければ不足しているかのように話している時に、ユダヤ主義と同じ異端への一歩を踏み出すのです。

5 私たちは彼らに一時も譲歩しませんでした。それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。

ここが大事ですね、「一時も譲歩し」ないこと、それから、「常に保たれる」ということです。キリスト者の持つ自由、つまり、イエス・キリストにあって神が行ってくださったことによるのみ、その十字架と復活の御業によるのみ救いがあるという自由です。これは神からの恵みであり、神からの賜物です。そして、恵みであり、賜物であるこの自由は、きちんとそれを守っていく、純粋に保っていくからこそ、地面に掘られた井戸のように、水が出てきません。したがって、パウロはこの真理を保っていく、純粋なままにしていくために、絶え間ない努力をしていました。彼は人々から反対を受けました。誹りも受けました。そして、物理的な迫害も受けました。なぜここまで憎まれなければいけなかったのか、分かりませんが、それでも彼は神の恵みだけの福音、信仰によるだけの救いを頑固に曲げませんでした。だからこそ、私たちは今、その恩恵に預かっているのです。もし、ここでパウロが一步譲ったのであれば、キリストの救いはユダヤ教の一派として、ごく一部の者たちによるのみ与えられて、そのまま消滅していったことでしょう。

ですから、私たちもまた、奴隷の頸木を負わないようにしっかりと立っていなければいけないのです。「5:1 キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」私たち自身が、パウロが一步も譲らずに固持した福音の真理に、しっかり立つことよって自由を保っている必要があります。そのために、誰かから批判を受けるかもしれません。仲間外れにされるかもしれません。しかし、自分は罪からキリストによって自由にされたのです。そして、何かをしなければ救われないうとする、決して救われようもない死の奴隷の中に生きていたのです。キリストの十字架だけが、自分を救いました。この真理を守り、この自由のために信仰の戦いを戦います。

2A 付け加えられなかった福音 6-10

そして、このように神の恵みによって、信仰によってのみ救われるとする福音は、パウロだけでなく、ユダヤ人に宣教していたペテロたちも共有していたものなのです。

1B それぞれの召命 6-8

6 そして、おもだった者と見られていた人たちからは、..彼らがどれほどの人たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません。..そのおもだった人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。

まずパウロは、先ほどから主だった人々という言葉を使っていましたが、ここで、「彼らがどれほどの人たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません。」と言っています。パウロはもちろん、これらの使徒たちを尊敬しています。彼らは復活の主を見て、その前に三年以上、主イエス様と共に歩んできた人々であり、今は主を愛し、エルサレムの教会の監督であり、主に仕えている尊い兄弟たちです。彼らを尊敬していないはずがありません。しかし、それは主イエス・キリストにあって、全ての人が神の前に等しく罪人であり、ただ信仰によってのみ義と認められるという福音の真理を変えるものではないのです。11 節以降に出てきますが、ペテロがむしろ福音の真理に違反するような行動を取ったので、パウロが彼の面前で責める所が出てきます。

私たちは、指導者であっても、他の誰であっても尊敬をすべき存在ですが、頼っていけない存在です。飽くまでもつながるのは、主イエス・キリストご自身であり、この方に近づくために、他の人々が用いられるかもしれませんが、イエス様が自分の主となるのです。

そして、「そのおもだった人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。」と言っています。ユダヤ人に対して語っているのですから、律法を守っている人々が多いはずですが。パウロが仕えている異邦人の人たちが、まるで律法を度外視して生きていても、表向き全く正反対の生活をしているユダヤ人でも、それでもペテロは知っていました。救いは、ただ信仰によってのみしか来ないことを。エルサレムで、これらのユダヤ主義者とパウロたちとが激しい議論になった時に、ペテロが立ちあがってこう言いました。「使徒 15:8-11 そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」

信仰を持ってからも、律法に熱心なユダヤ人たちの一部にとっては、驚きだったかもしれません。ペテロたちは決して、律法に熱心な信者たちを排除したくありませんでした。まだ律法を守らなけ

れば良心が汚れるという、信仰の弱さから来るものであることを知っていたから、それで牧会的な配慮で、自由になりなさいと強く勧めていなかったのかもしれませんが。けれども、彼らはキリストの体の大きさを見ていました。また、神の御国のご計画の広さを知っていました。御体は、異邦人も内包するものであり、実にそこにはユダヤ人と異邦人の優劣の差はなく、共に御国を相続する者となっていることを知っていたのです。

7 それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。8 ペテロにみわざをなして、割礼を受けた者への使徒となさった方が、私にもみわざをなして、異邦人への使徒としてくださったのです。

表面的なところしか見ていない人々は、ペテロやヨハネ、またヤコブと、パウロが別々の福音を伝えていると思っていたことでしょう。しかし、それは福音が異なっているのではなく召しが異なっただけです。ペテロは、ユダヤ人に福音を伝えるための使徒、パウロは異邦人に福音を伝えるための使徒です。もちろん、どちらもユダヤ人にも異邦人にも伝えています。ペテロは、まさにコルネリオに福音を伝えました。パウロは、ユダヤ教の会堂に入ってそこで伝道するところから始めました。しかし、強調点が異なっただけです。

しばしば、私たちはキリストの体の広さを考えないで、分派的な考えを持ちます。神が罪人を救うためにキリストを遣わされた、という単純な真理を超えて、その他の事柄についての違いによって、神の救いの広がりの中に壁を設けて狭めてしまうことがあります。パウロは、「あなたは、手ではないから体に属さない、と言えないでしょう。」ということ、コリント第一 14 章で話しました。ある人は手であり、また別の人は足なのです。そこで、ある聖書理解が異なることによって、あの人は救われていないかもしれないと考えるのは間違いです。礼拝の守り方が違うというのも理由になりません。あることがらについて、聖書に基づいて議論するのは大切です。それで、どう考えてみても、その意見は聖書的ではないと考えられるものもあるでしょう。けれども、キリストの福音について信仰が一致しているのであれば、私たちは一つにされているのです。

2B 交わりの右手 9-10

9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。

すばらしいですね、召しが異なることを認めて、それでもって自分たちは一つにされていることを、右手の握手によって交わりのしるしとしました。交わりのあるところに、キリストの平和があります。「エペソ 2:14-16 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒

めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」

興味深いことを分かち合わせていただきます。ある牧師さんから、怒りのメールが届きました。それは、聖書にある一つの教えについて、あるミニストリーの主管の教えを信奉しているため、その教団が荒れに荒れてしまっているという怒りでした。たまたま、そのミニストリーの大きな部分と私たちの聖書理解は似通った部分があります。むしろその教団の考え方と、違うかもしれません。しかし私は、その人の言われていることにむしろ同感しました。なぜか？主イエス・キリストの救いに加えて、自分の神学や聖書理解を同じ教団の牧師たちに押し付けてきたからです。「これこそが、正しい理解であり、日本の教会はこれだから成長しないのだ。」と言わんばかりの勢いです。私たちとは異なる考えを持っている人々は大勢います。けれども、それは召しの違いであり、キリストの体の各部分を担っているのです。表面的な違いはあっても、福音を信じているというところで一つにされているのです。それよりも、福音に加えて、「これがなければ福音ではない、救われない」と言わんばかりの自己主張は、ユダヤ主義者の轍を踏むことになります。

10 ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところです。

旧約時代にも、そして新約の教会にも、貧しい人を顧みることについては命令を私たちは受けています。今、熊本地震のことで、教会として祈り、救済の手を差し伸べましたね。これは、付け足しではなく、教会のしなければいけない神の命令の一つです。パウロたちに、ペテロたちが忘れることのないように、と言っていますが、パウロたちは確かに大いにやってきたことでした。

実に、エルサレムの人たちは、恒常的に財政的に苦しい状態にありました。世界的な大飢饉があった時に、アンティオケの教会にいた弟子たちは、救援物資をユダヤの教会にいる兄弟たちに送りました(使徒 11:29-30)。そして、パウロはマケドニヤやアカヤの教会に対して、醸金をしてほしいとお願い、彼がエルサレムに戻る時に貧しい兄弟たちにその支援金を渡しています(ローマ 15:26-27)。こうしたところに、キリストの体の麗しさがありません。どこかが乏しければ、他の部分が補います。それでどちらも多すぎることなく、どちらも不足することがないようにします。

このようにして、主は神の恵みの福音の中に、キリストの体の一致をお与えになっています。そこから、神の愛が流れ出ます。神が源ですが、私たちが断固としてそれを保持する義務を持っています。私たちが一步も譲らず、それを保持あるいは維持しているのであれば、主は必ずそこにご自身の愛と恵みを注ぎ、私たちの交わりを豊かに祝福してくださるのです。誰に付くのではなく、主ご自身につながります。